

利根川水運の街を巡る



利根川水運の図（関宿城博物館より）

日本の川の 99%は江戸時代に流れが定まったそうです。つまり、今見ている河川のほとんどは江戸時代の人々の手が加わっているのです。関東地方の河川はほとんどが江戸初期に関東郡代伊奈氏によって流れを変えられたり、廃されたり、新しく掘られたりして整理されました。利根川の流れを江戸から銚子に付け替える東遷事業には伊奈氏 3 代、じつに 60 年の年月がかかりました。特に 2 代目の忠治は一生を土木工事に明け暮れたといつてもよいほど関東中を掘り返し現在の関東の基礎を築きました。

利根川東遷の目的については治水と新田開発のほかに水運を開くという目的がありました。江戸時代の初期、江戸には江戸の街づくりのための職人や商人、全国の大名が集まってきたため、急速に人口が増えました。物品や材料はいくらあっても足りません。これらを江戸にもたらすには人馬陸路ではなく大量輸送可能な船でした。海運は西回り航路といって日本海沿岸地域—瀬戸内—大阪—江戸という比較的安全な航路があってこの航路が大きな物流の柱でした。しかし、江戸により近い関東から物資を集めの方が日数にしろ費用にしろ海運よりかかりませんし、また、東北と流通するには危険な房総沖を通らないで江戸に来られるルートの開発が不可欠だったので、幕府は関東の隅から隅まで内陸水運を整備することを決意し、これをまだ 20 代の伊奈半十郎忠治に命じました。

忠治は結局、利根川東遷を見ることなく没しますが、跡を継いだ忠克が1654年に事業を完成させます。ここに現在の日本一大運河利根川が完成します。この水運路は江戸時代を通じて物流の中心となり、時を経るごとに関東の村々に富と文化、産業を招来しました。やがて関東で成長した産業は西からくる「下りもの」も品質や生産量を上回るようにさえなりました。倉賀野（高崎市）境（猿島郡）野田（野田市）佐原（香取市）などこの水運の恩恵を受けた町はその繁栄ぶりから江戸勝りと呼ばれるほどになりました。今ではその名残は野田や佐原市街に残すのみになりましたが、かつてはこのような街が川沿いのいたるところにあって、豊かな関東象徴だったのです。

潮来の歴史

潮来市は、古くから水運陸路の要所として栄え、大化の改新のころ国府（現在の石岡市）から鹿島神宮へ通じる駅路「板来の駅」を設けたのがまちの始まりだと伝えられています。その昔は、地名を「伊多古」「伊多久」と称し、また常陸風土記には「板来」と書かれていたのを、元禄年間に徳川光圀公が「鹿島の潮宮」にあやかって「潮来」と書き改め、今日に至っていると云われています。

江戸時代の潮来は下総の佐原と並ぶ水運の要所で、東北諸藩から江戸へ運送される米・海産物・材木・その他の物質は潮来を経由して運ばれました。そのため最盛期には年間400艘もの荷船が出入りしたといわれます。その繁栄ぶりは、水戸藩が御用金制度をはじめた元禄13年（1700年）に、潮来の商人の献金額が藩全体の三分の一を占めたことからもうかがい知ることができます。



樽を満載するひらた船

潮来が水運の基地として栄えた時期には遊郭や引出茶屋が軒を連ねる賑わいぶりで、江戸方面から多くの文人墨客が来訪し、数々の作品を残しています。その頃、牛堀河岸も「風待ち港」として潮来と同様に繁栄しました。

一方、江戸時代には、新田開発によって広大な農地と村落が形成されました。対岸の十六

島をはじめ、二重谷(幕府領)・大洲・徳島(水戸藩領)などの開発はその例で、水郷の穀倉地帯が造成されたのです。

しかし、潮来が大いに繁栄したのは、この江戸時代中期ころまでであり、元文年代(1736～1740年)の大洪水で利根川の本流が佐原地方に移ると、中継港としての機能を失ってしまいました。

さらに、明治に入って常磐線が開通し、陸運が盛んになってからは、水運は一挙に衰退し、それに歩調を合わせるかのようにして潮来も寂れてしまいました。それ以来、この地方では、産業らしき産業もなかったことから、地元の若い娘の収入源として、観光客の案内を兼ねてサッパを操ったところ観光客に好評を博したことから“娘船頭さん”として知られるようになりました。昭和30年3月には、美空ひばりさんの「娘船頭さん」のロケが水郷潮来で行われたのがきっかけとなり、その名は全国的に知られるようになりました。



映画「娘船頭さん」主演の美空ひばり

この地方は、周囲を水に囲まれた水郷地帯であったことから、この地域一体には水路(江間)が縦横に張りめぐらされ、嫁入りする際に花嫁や嫁入り道具を運搬するときにもサッパ舟が使われており、昭和30年前半ごろまでは日常的に行われていました。この嫁入舟が、全国的に知られるようになったのは、昭和31年10月に松竹映画「花嫁募集中」とタイアップし“ミス花嫁”を募集したことがきっかけとなり、花村菊江さんが歌った「潮来花嫁さん」の大ヒットによりさらに全国的に知られるようになりました。

佐原の江戸勝り



関東3大山車祭りの佐原の大祭。300年の伝統を誇る。

佐原の市街地を流れる利根川の支流、小野川である。佐原は、江戸時代中期から昭和初期にかけて利根川の水運で栄えた水郷の商都で、市街地の中央を流れる小野川沿いの町並みが、かつての繁栄をしのばせています。その繁栄ぶりは「利根川図志」（1838年、赤松宗旦・著）に、「佐原は下利根附第一繁栄の地なり。村の中程に川ありて（略）米穀諸荷物の揚下げ、旅人の宿、川口より此所まで先をあらそひ両岸の狭きをうらみ、誠に水陸往来の群衆、晝（昼）夜止む時なし」と記され、また、俗謡に「お江戸見たけりや 佐原へござれ、佐原本町江戸優り」と唄われたほどです。



佐原の中心部を流れる小野川と街並み

扱われた物資は、米・雑穀・薪炭・酒・醤油などで、往路はこれらを江戸へ運び、復路は呉服や日常品を仕入れて佐原周辺に売り捌いた。佐原はさらに、東北地方への物資輸送の中継地としての役割も大きかったという。こうした経済的発展は地域の文化や学問にも大きな影響を与え、天文学・地図作製の伊能忠敬、国学者・画家・歌人の楫取魚彦、儒学・教育者の久保木竹窓などを輩出しました。

かつては利根川や荒川、新河岸川などの河川にはその水運によって多くの河岸が造られ、多くの人々や物が往来し繁栄を極めていました。佐原はその繁栄ぶりを偲ぶことができる唯一の街として貴重な文化・景観を残しています。

2016.11.12

新井宿駅と地域まちづくり協議会のバスツアー「水郷潮来・小江戸佐原」利根川水運の街を巡る」